

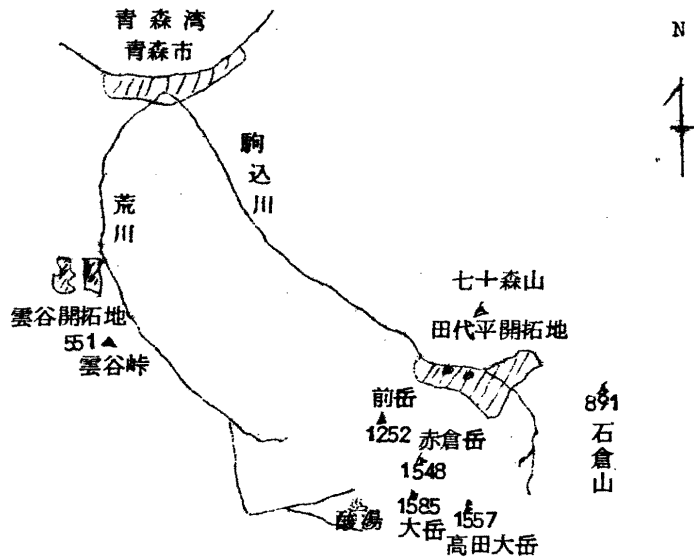
八甲田山麓における開拓地の地理学的研究

石 岡 在 正

一、 序

第二次大戦後、海外引揚者、都市罹災者の都市復帰が一時的に困難であつた状態に於いて、食料難打開と合わせ、現実的問題解決の手段として1945年緊急開拓事業が始められた。この事業は充分な調査なくして、行なわれた為、入植者においては、営農確立のため幾多の困難をおよぼす結果となつた。青森県に於いても岩木山麓、八甲田山麓に数多くの開拓が行なわれたのであるが、ここで、八甲田北麓の二開拓地を経済的に分析し、その開拓地の自然環境のもつ社会的、経済的意義がどのようなものであり、いかなる経過をもつて今日に至つたかを究明し、その地域性を把握しようとして試みたものである。

地域概略図



二、開拓地の地域概要

雲谷開拓地は十和田北線、国鉄、青森市営両バスで青森駅より約四十分、標高553mの雲谷峠を南に配した平均標高230m、東西2kmの雲谷と呼ばれる高原地帯に位置する。水系は西に合子沢川、東に横内川が北流する。いずれも数条の必条谷を集水し、本流の荒川に注い

である。土壌は平坦地と傾斜地によつて幾分相違がみられるが表層30~50cmの火山灰性黒色土壌であり、下層は火山浮石及び砂土によつて形成されている。気象条件は月平均気温20°C以上は7、8月より見られるが5月の平均気温が13.8°Cであり、農作物の成熟にはさして支障は見られぬ。冬期間2m近くの積雪量があるが、雲谷スキー場開設によつてバスが運行され交通は遮断される事はなく社会条件としてはさほど悪いものではない。

一方田代平開拓地は八甲田北麓のほぼ中腹に位置し、南西部に標高1500m級の大岳、赤倉岳など配し、北東部には800m級の石倉山、高山等にさえぎられる平均標高570mの平坦な盆地に位置する。水系は駒込川に注ぐ源流の空川が地区中央部でPH2ほどの湯川と合流する。土壌は火山灰土と湖成堆積物との複雑な様相を呈しており、表層、下層とも火山灰腐植土、泥炭土の混層によつて形成される。又、随所に陥凹湿地帯が存在し、直径1mほどの火山礫が散在し、開墾に大きな妨害となつている。夏期間はバスは運行するが冬期間は積雪量2m以上となるため、交通は遮断されまづたの孤立状態となつている。又冷害最大の因である偏東風常襲地であり、7、8月でさえ20°C以下の日がみられ、無霜日数120日前後というすくなさである。

三 開拓地の農業経営

開拓地当面の問題としての飲料自給は火山麓

と云う自然条件の制約のなる地域に於いては、時間的経過を必要とする。雲谷開拓地に於いては、入植以来、自給作物としての馬鈴薯、あわ、換金作物としてナタネ、そば、大豆、小豆の栽培が試みられた。作付状態を見ると換金作物が数年間60%以上をしめしているが、いずれも穀物購入の手段あつた。しかし、土地生産性、労働生産性の低さにより、一戸平均20万円という政府借入金を生活にあてるという状態であつた。それ故、年々耕地拡大、土壌改良など行なわれ、反収も増加するが、農業だけでは単純再生産さえおぼつかないほどで、農閑期には県道改築工業やその他の肉体労働に従事して生活を維持している。33年頃まで全戸が20万円未満の農業収入であり、農業所得によつて年間家計70%賅える農家もほぼ見うけられていない。このように換金作物を主体とした農業形態を行なつてきたが、労力投下が著しい上、経済的安定性の低い事より、33年頃より県の指示もあり、畜産主体の農業形態に転起する傾向が見られてくる。元来この地域は交通条件にめぐまれており、一戸平均3.5haの広い耕地の半分を飼料作物畑に転化し、乳牛を飼養するのはさほど困難ではなかつた。このような農業形式を変える事は作付状態に大きな変動をもたらすととも土地への労力投下を減じさせ、反当収量の低下をもたらす結果となる。収穫量においても33年をピークとして下降線をたどるが、この地域の最終的目的である酪農一本化の前徴である。このように換金作物に比べ幾分経済的安定性のある酪農経営により徐々に収益も高められ35年から38年にかけては、30

万以上の農業粗収入をもつ農家が60%をしめ、ほぼ生活も安定する事となつた。この農業粗収入の内訳をみると耕種と畜産との比率によつて各戸の収入の差が現われている。又、飼料畑や乳牛の飼育は女、子供にまかせ男は他の肉体労働に従事し年間一戸平均10万円ほどの農外収入を上げている。要するに畜産主体の農家ほど労力の余剰がみられ総収入も多い状態となつている。31年頃より水稻作付を4農家で試み、収入の安定をはかるうとしたが、浸透性の土壌、周辺の河川が低地を流れている関係より、広く作付することができず、4戸合せ1haにとどまる。これら水田耕作を行なつている農家は水田拡張を志し、畜産はほとんど行なつていない。以上の如くこの地域においては酪農転化にともない経済的に安定し、ほぼ農業を確立したと見受けられる。

一方田代平開拓地に於いては、22年より開墾が始められ、一戸平均10haという広大な計画耕地を有するものの、ほぼ手労働と畜力に依存していたため思うような能率を上げ得ず、いざ作付したものの、気候が寒冷であり、強度の酸性を呈する土壌故、収穫がまつたく見られぬ耕地が多い状態であつた。そのため生活の窮乏は目を見はるものであつた。又、雲谷のように社会条件にめぐまれていないので、他の職業に労力を投下できず、冬期間の交通の遮断は生活困窮に拍車をかけた。自給作物としての馬鈴薯を多く作付したが、反収もさして伸びず政府借入金当座をしのぐという状態が31年頃まで続くのである。年々土壌を改善し、反収も徐々に高まるが、安定した生活を得るにはある程度の年数を必要とし、31年までに62世帯の脱農家を見る結果となる。この地域も33年頃より飼料作物の大幅な作付を見るが、これは乳牛飼育が交通上冬期間制約を受ける事から肉牛飼育が行なわれた事によるものである。しかし肉牛飼育は価格に於いて安定性が欠け、現金収入を短時間で得られぬという短所がある。そのため全農家の成年男子は青森市部に職を求め、又温泉湧出によるヘルスセンター設立にともなつてのそこで雑役夫などになり、38年には80%以上が第二種兼業農家で構成される。このように農業に対しては、主婦を主体とした従的なものになつていく傾向が見られる。それをうらぎれるものとして38年に於て農業粗収入30万円以上の農家が7戸ほど見られるほどで他は20万円以下の農業粗収入である。しかし農外収入は各戸とも20万円近くあげている。35年頃より水稻を作付する農家が現われてくるがこれは、肥料増設、土壌改良にともなつて水田単作への試みとして行なわれたものであるが、反収も幾分の量に達し、ある程度の期待がもてることにより現在湿地帯は水田に転化し、畑地もその傾向が見られる。兼業によつて生活を維持しているが、安定性の上昇という目的のため低暖地農業の実施がこの地区の現状である。

四 結 論

火山山麓開拓地に於いては近年不利な自然条件を克服し農業を確立し、土地の合理的利用と

いう面に伸びているが、これら開拓地では水稻耕作を主体とした低暖地農業の実施、あるいは酪農、高級蔬菜栽培を主体とした混合農業の経営と二つの型が現われている。現に雲谷開拓地に於いては交通条件の有利さ、耕地所有面積が多いということはそのまま酪農主体の経営を確立していつた。従来自給のみを目指した開拓農業は広い土地を利用した一つの転起とも云える。又この地区に於いて、経済的安定性の高い水稻耕作は、全面的土壌の改良、水系の不利を背負つての足踏みとして残るだけである。

これに比べ田代平開拓地は社会条件、気象条件に幾分の不利が見られるが、それを反映してか、牛にかわり肉牛の飼育を行なつている。しかし、高率を示す第二種養業がみられるのは、農業的に不成功と見てよいものであろう。だが前地区より広い耕地面積を有し、又止水性に富む土壌、酸性を呈す河川ではあるが水利にめぐまれている点より、土壌改良、深耕、侵蝕防止、耐寒種の採用などにより年々従来の畑地を転化していく傾向が見られる。すなわち、反収は少ないが総収量に於いてそれを補なうという意図である。未だ初歩的段階ではあるが農業技術の向上にもなり水田単作地帯を目指しているのが現状である。

以上のようにこれら同じ八甲田北麓に位置する二開拓地は高原と盆地という地形上の相違、交通という社会環境の相違より、農業形態にそれぞれの要因を反映しているとともに、青森市に対する社会的影響もおのずから相違が現われている。

開拓地作物作付面積累年変化

		雲 谷					田 代 平				
年次	種類	29年	31年	33年	35年	38年	29年	31年	33年	35年	38年
	水 稻	0ha	0.2	0.6	1.1	1.0	0	0	0	0.3	1.0
	陸 稻	0	0	0.7	0.5	0	0	0	0	0	0
	小 麦	2.3	0.1	0.1	0.2	0.2	0	0	0	0	0
	大 麦	0	0	0	0.1	0.1	0	0	0	0	0
	ラ イ 麦	0.4	0	1.0	0	0	0	0	0	0	0
	はだか 麦	0	0	0	0.2	0	0	0	0	0	0
	とうもろこし	1.1	2.1	3.1	0.7	0.5	0	3.0	4.6	5.0	4.9
	あ わ	1.5	1.9	2.5	0.9	0	0	0	0	0.2	0
	ひ え	0.5	2.5	1.8	1.4	0	6.4	13.5	9.0	17.3	17.3
	そ ば	4.2	6.4	7.2	5.8	4.0	0	6.0	4.4	1.9	0.4
	大 豆	12.1	7.5	7.7	4.1	1.1	3.0	3.8	3.9	3.3	1.6
	小 豆	3.4	3.0	3.6	2.8	1.6	1.0	3.6	3.0	3.4	3.4
	馬 鈴 薯	6.2	2.6	4.0	3.3	1.7	20.8	2.8	3.2	1.4	2.7
	大 根	0.9	0.1	0.1	3.1	0.2	3.5	1.2	0	0.4	0
	キャベツ	0.6	0	0		0.1	1.0	0.5	0	2.1	0

雲 谷 . 田 代 平

年次 種類	29年	31年	33年	35年	38年	29年	31年	33年	35年	38年
すいか	0	0.1	0	0.9	0.1	0	0	0	0	0
リンゴ	0	0	0	0.7	0.5	0	0	0	0	0
ブドウ	0	0	0	0.3	0.3	0	0	0	0	0
ナタネ	7.6	9.7	10.7	9.0	5.9	0	0.7	1.5	2.5	5.4
ビート	0	0	0	0	3.9	0	0	0	0	0
青刈類	1.5	4.9	3.7	11.0	14.6	0	2.0	0	13.0	26.3
牧草類	1.0	0.4	5.8	9.1	15.3	0	0.6	6.9	9.6	21.2
えん麦	0.8	3.2	4.4	2.9	2.1	11.3	13.0	20.0	16.7	18.9
その他	3.0	6.5	4.9	5.2	1.3	2.3	5.6	13.2	4.6	5.1
収穫皆無回数	4.2	3.7	0	0	0	26.8	3.4	0	0	0

開拓地農業租収入別戸数

	29年	31年	33年	35年	38年	29年	31年	33年	35年	38年
20万円未満	26戸	17	25	9	8	3戸	30	29	13	23
30~20万円	2	7	1	7	6	0	0	0	16	7
50~30万円	1	2	0	7	4	0	0	0	0	0
70~50万円	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0